動画を用いた
効果的な英語学習を目指して

関連するSDGsの国際目標

全学共通教育推進機構　　講師　　濱上　桂菜
研究分野：英語教育、認知言語学

概要：英語学習における動画教材の効果的な使用法を検証しています。動画は、ジェスチャーや抑揚などの情報を多く含むため、学習者にとって有益であることが明らかになっています。しかし、実際に授業でどのような使い方をすると効果があるのかなど、動画教材について明らかになっていないことがたくさんあります。そこで、ショート動画を作成し教室外で学習してもらう、動画自動再生機能を用いてインタラクティブな会話練習をしてもらうなどして、動画を使った学習効果を調べています。

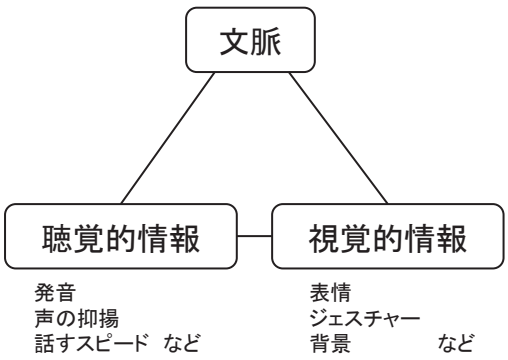
■教材としての動画とその問題点

近年、動画の視聴スタイルの変化は語学学習にも大きな影響を与えています。かつて、動画はテレビを通して見るものでした。つまり、家で家族と共有して見るものでしたが、今日では、以前と比較にならないほど個人の日常生活の一部になっています。どこにいても個人で動画にアクセスできるようになった今、動画を語学教材として使わない手はありません。

その一方で、教材としての動画作りや動画収集が求められています。インターネット上には英語の動画が溢れており、学習者が語学教材として適切な動画にアクセスすることが難しくなっていると思われます。

また、動画であればいいのではなく、動画をどのように使うと学習効果が高いのかはまだ具体的に明らかになっていません。現実には、効果的な学習方法が分からないまま、多種多様な動画を無計画に視聴して学習を試むケースや、視聴するだけで十分に習得に結びつかないまま終わってしまうケースも少なくないと思われます。

教材としての動画の強み



■オンライン動画を用いた語学学習の効果検証

そこで、オンラインでアクセスできるショート動画を作成し、学習者たちの反応やその効果を調べました。結果として、より多くの種類の動画を、より多くの回数を見た学習者ほど、英語表現を習得していました。つまり、教科書だけでなく、動画を合わせて用いたほうが学習効果が高いことになります。それだけでなく、動画によっては、動画を通した英語学習の印象がかなり悪いことが分かりました。具体的には、「怒り」や「不満」などのネガティブな感情を表す表現を学ぶ動画を見ることに対して、一部の学習者が精神的な負担を感じていました。動画は、相手の表情やジェスチャー、声の抑揚などの情報が多いという点で教科書などの他教材よりも現実に近いといえますが、だからこそ現れる欠点もあるのです。